

# キリスト教主義教育の展開

ーキリスト教主義学校における宗教リテラシーのあり方をめぐって

舟 木 讓

今日の世界において表面化している文化・習慣・宗教・歴史・経済状況等々の相違とそこから生まれる対立構造を解決し、そうした「違い」を尊重しつつ共存する道を見出すことは私たちが向き合うべき喫緊の課題である。本プロジェクトは、代表研究者のほかに、本学の前川 裕 理工学部専任講師・宗教主事、Jeffrey Mensendiek 神学部准教授・宗教センター宗教主事、山本俊正 商学部教授・宗教主事の計4名の研究員で構成され、上述の相違の中でも「信仰」という個人や社会にとって大きな影響力を有する事柄に焦点を当て、異なる宗教的価値観・信仰に基づく倫理観・人生観ならびに信仰的行為を正確に理解し、それぞれの「信仰」を尊重しつつ、異なる「信仰」が対立することなく共存する可能性を探ることを目的として2015年度より開始された。

特に「キリスト教主義」という一つの「信仰的」立場を有する本学において、実際に教育と研究を行っているムスリムの方たちへの「祈りの場」の提供や「ハラル」な生活をどこまで「合理的な配慮」にしたがって保証するかは、学校全体にとっても早急に判断を迫られている課題である。現状は、各キャンパスにおいて、個人的な対応や緊急かつ時限的な対応にとどまっていることもあり、日本ならびに海外における現状ならびに国内外のキリスト教主義学校における「宗教リテラシー」実践への取り組みの現状を調査し、参考とすることを本年度の目的とした。そのうえで、今年度は以下の講演会・研究会を実施し、また各研究員が個々に他大学等の現状を調査することとした。またその他に次の講演会・研究会を開催することでそうした問題への理解を深め、また啓発の機会とした。

最初に小原克博氏（同志社大学神学部教授）を講師として「キリスト教とイスラム教の対話」を主題とした講演会（2015.12.14）を通じて、現在の両宗教の現状ならびに近い将来に予想される状況を再確認し、その後研究員との意見交換を通じて、両宗教の共存の可能性とそれを阻んでいる壁に関して理解を深めることができた。

次に、本学でも実施されている「動物実験」において、その対象となった「実験動物」への感謝を教育・研究機関としてどのように表現し、また実際に実験にあたった学生らへの教育的配慮をどう実践するかという問題を「宗教リテラシー」の観点から調査し、本学での実践に向けての準備のため、先駆的な実践をされている名古屋学院大学の事例を研究会という場で紹介していただいた。講師は大宮有博氏（名古屋学院大学准教授）で「実験動物感謝式—名古屋学院大学での事例から—」（2016.2.10）という主題で、実際に実施されているキリスト教の礼拝形式での感謝式を行っていただき、その後、参加者・研究員等との質疑応答を実施し、理解を深め、本学での実施に向けての良き示唆をいただくことが出来、その結果を受けて、2016年度の実施に向けて準備していくこととなった。また本研究会は神戸三田キャンパスで実施されたが、上ヶ原キャンパスにも遠隔で送信し、両キャンパスでの活発な意見交換が行われたことも意義深かったと思われる。

最後に、他大学のムスリム学生らへの対応に関しての情報収取としては、本学で実施されたACUCA（Association of Christian Universities and Colleges in Asia）日本委員会（2016.2.24）において、出席校であった桜美林大学・大阪女学院大学・国際基督教大学・上智大学・同志社大学・南山大学・明治学院大学・桃山学院大学の現状に関する情報交換を行うことで、キリスト教という信仰的立場を有する各大学の対応に関する現状と課題について共有することが出来た。今年度は初年度ということもあり当初予定のフィールド・ワークの実施をすることが出来なかったが、次年度はその実施を進め、情報収集のもとで、本学における「宗教リテラシー」のあり方に関する研究を進める予定である。